

2. 全学を通して重要な提言

2.1. 提言概要

本章では、学勢調査 2016 の全体像を通し、重要な事項を取りまとめて提言します。今回の学勢調査では数値データや自由記述においても教育改革が大きな話題になっていました。学生の意見としては「元に戻してほしい」など教育改革に反対する意見も届きましたが、教育改革はまだ始まったばかりです。学勢調査にすべてその是非を問うほどに十分な期間が経っていないことと、制度の変更による混乱や教職員の不慣れが学生の意見に大きく関わってきていると思われることから、提言作成には慎重を期しました。教育改革の途上において生じていると思われる不具合に注目し、学勢調査のデータから学生の目線で解決を図り、教育改革を学生目線でサポートできるような提言を行います。本章「全学を通して重要な提言」は教育改革が学生や教職員全員にとって少しでも良いものになるように願った提言となっています。

本章で挙げる重要な提言を表 2.1.1 にまとめました。「1. 教育改革における意見交換の促進」では教育改革への意見交換の促進について提言を行います。「2. 情報に目を向けない学生への情報の伝達」では、自ら情報を得ようとしないう学生にもしっかりと情報を伝えることを目的としており、大学の様々なサービスを学生にとってより有効なものへとすることを目指します。教育改革によって今後の大学のサービスも状況に合わせて変化する中、様々な広報の手法を考え、提言を行います。「3. 動画化による講義の補助」ではクォーター制や講義の英語化によって学生はより多くの予習、復習が必要になってきており、その学習を補助することと、病欠や学会参加等で講義を受けられなかった学生のために学習機会を提供することを目的に講義の動画化について提言を行います。講義の英語化が学生の精神的負担となっていることに対する解決策の一つとして、留学経験を与えることが考えられますが、依然として留学に行く学生数は少ないのが現状です。「4. 留学への支援の更なる強化」では、留学によって学生に国際的経験を積んでもらう本来の目的に加え、留学を促すために、語学に自信がない学生へのフォローと経済的支援が重要であると考え、提言を行います。

2. 全学を通して重要な提言

表 2.1.1 重要な提言テーマとその具体的な提言一覧

提言テーマ	具体的な提言
1. 教育改革における意見交換の促進	大学は学生の意見や提言などを踏まえて、急激な変化による混乱を収束させることを今一度心がける。
	大学主導の下、教育工学の専門家と東工大の職員を交えて制度の長所や短所、今後の展望をまとめるような意見交換会を行う。
2. 情報に目を向けない学生への情報の伝達	附属図書館のリフレッシュルームに留学の手引きなどの情報冊子を設置する。
	大型のフリースペース等を設置する場合にはタッチパネル式の電子掲示板を設置する。
	附属図書館で留学フェアの広報をする。
	大岡山の旧附属図書館跡地に建設予定の建物で、留学フェアを行う。
3. 動画化による講義の補助	講義の動画化への問題点を分析するため、教員に向けたアンケートやヒアリングを行う。
	簡易的な録画の手法での「動画化による講義の補助」を試行的に行う。
	動画化への補助スタッフとして、TA 雇用を大学側がサポートする。
4. 留学への支援の更なる強化	東工大の在学生向けの留学案内の HP に「留学を始めようと考えている方へ」というページを作る。
	「月 8 万円の支援」からさらに支給額を上げ、渡航費も支援する。

2.2. 重要な提言 1:教育改革における意見交換の促進

今回の学勢調査で学生から最も多く寄せられた意見は教育改革に関するものですが、なかでも抵抗感によると思われる意見が数多く寄せられました。制度を急激かつ大幅に変えるとき、抵抗感は必ず伴いますので、この抵抗感を早く緩和させる工夫を同時に考慮する必要があります。東工大の教育改革は学内の関係部局の多大な努力で実行されています。混乱を最小限にするための対応も非常に迅速に行われていると感じています。それでも、図 2.2.1 に見られる、教育改革によって実施されるようになった講義の英語化に対する抵抗感や自由記述に寄せられた多くの意見をひとつの例として考えると、依然として解決すべき課題は多く残されています。大学は今後も学生及び教職員の意見や要望に耳を傾け、大学が一体となってより良い教育環境を作っていこうという意識を共有していく事が重要であると考えられます。学勢調査の結果には学生の数多くの意見が盛り込まれているため、教育改革をより実効性のあるものにするために参考になる面が大きいであろうと思われます。これらを踏まえて、生じている混乱を早期に収束させる働きかけを今一度試みていただくことを提言します。教育改革がスタートして1年が経とうとしています。すべての構成員が改めて制度の特徴を把握し、認識を統一するためにも、教育工学の専門家と東工大の教職員を交えて制度の長所や短所、今後の展望をまとめるような、意見交換会を行うことを提言します。

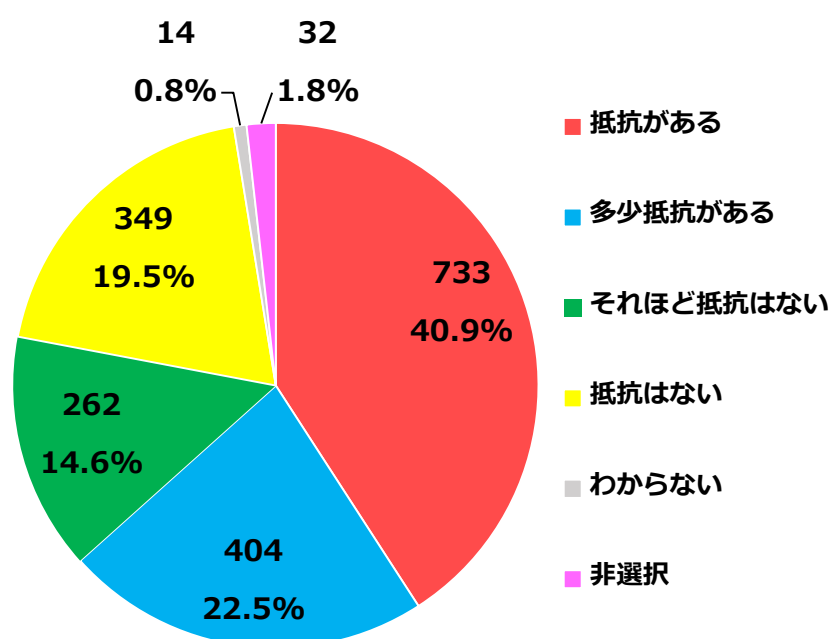


図 2.2.1 教育改革で実施された制度に対する反応の例
(英語で行われる講義に対する抵抗感)

2.3. 重要な提言 2: 情報に目を向けない学生への情報の伝達

学勢調査 2016 の回答学生から、「(奨学金・留学などの)サービスの情報をもっと広報してほしい」という意見が自由記述に 21 件寄せられました。大学は様々なサービスを展開し、東工大メールニュースなどで情報発信をしていますが、それを十分活用できていない学生が多数存在していると考えられます。大学を卒業するという点において、留学などの情報は必ずしも必要ではなく、そのような情報に目を向けない学生も多いと考えます。根拠として、重要な提言 4 でも述べますが、70%の学生が留学を経験していない一方、50%を超える学生が「大いにしたい」「機会があればしたい」と答えている現状にあります(図 2.5.3)。東工大のリベラルアーツ教育にみられるように、広い知見と積極性をもつ学生を育てることが重要視される中、普段の学生生活の中で幅広い知見に触れ合う機会を増やす情報伝達の重要性が高まっていると考えます。留学フェアや奨学金などの様々なサービスの存在を知り、活用することができる学生がいる一方で、情報に目を向けようとしていない学生は、様々なサービスの存在を知ることがないためにサービスを活用できていないということが考えられます。そこで提言として、大学の発信する情報に積極的に目を向けようとしていない学生への情報伝達の手段について提示します。

サービスは有効に利用したいユーザーがいてこそ効果を発揮するものであり、学生への情報伝達は様々な大学サービスを展開する上で極めて重要です。これまでの学勢調査においても情報伝達に関する事項は多く提言されてきました(学勢調査 2010、2012、2014)。その結果、大学も学生への情報伝達のツールを着々と拡充しており、全学生に配信される東工大メールニュースや HP の見やすさの向上、学修コンシェルジュ等の発信機能の強化等を例としてあげることができます。その一方、大学が多くの情報を発信しているにも関わらず、今回の学勢調査でも学生から情報伝達の不足という意見が寄せられていることから、今回は別の視点からこの課題にアプローチをすることを考えました。

大学のホームページや窓口からの情報取得は、学生がこれら情報媒体に対して自主的なアクションを起こすことが必要であり、情報に目を向けようとしない学生はその情報の存在すら知らないままである可能性があります。このような学生にも効果的に情報伝達を行う手段として、学生の動線に情報を配置することが有効であると考えました。前回の学勢調査 2014 では、教務課の前に設置されていた「大地震対応マニュアル」を、学生の目につきやすい場所に設置することで学生への配布を促進することを提言しました。その結果、講義室の前に「大地震対応マニュアル」を入れた小箱が設置され、実際に箱の中の冊数が減少していったことから、この対策は有効であったと考えられます。このように学生の目に触れやすいところへの情報媒体の設置が重要であると考えられます。本節では、情報に目を向けようとする意識が希薄な学生への情報伝達に対して、学生生活における動線への情報の設置を対処策として 2 つの提言をします。

1 番目に、リフレッシュルームなどのフリースペースに留学手引きなどの情報冊子や、電子掲示板(プラズマディスプレイなど)の設置を提言します。学内へのポスター掲示等では、載せられる情報量が少ないことや、目に留まらず見過ごされるケースも多いことから、不十分な面もあると考えられます。廊下などに掲示する広報手段は自ら積極的に情報を獲得しに行く学生には有効ですが、その他の学生に対してはあまり有効ではないと考えられます。普段、学生は学内では何かしらの目的をもって行動していることが多く、そのような状態では情報は見過ごすことが多いため、休憩中などの手が空いている時に情報を得られるようにすることが有効であると考えます。リフレッシュルームは情報伝達するには良いスペースです。実際に、南 7 号館では図 2.3.1 のように就職活動に関するチラシが置いてあります。このような情報伝達の展開をさまざまなところで行えると考えます。ただ、リフレッシュルームは各学院等の管轄であるため、情報には部局間の連携が必要となります。そのため情報を

発信したい場合、各部局の連携強化が重要になると考えます。ただし、就活や留学の情報はたびたび更新する必要があり、手間がかかることが問題です。その解決策としては、QRコードを活用することで物理的な手間を削減できるのではないかと考えます。また、電子掲示板も情報を伝える有効な手段です。電子掲示板の広報は一定の効果があると考えられます(図2.3.2)。紙面での情報伝達では、その更新に手間がかかりますが、電子掲示板では紙面よりも比較的容易に情報更新ができます。課題としては、電子掲示板の設置は高額であることや、画面の切り替えによって一度に伝達できる情報量が限られること、学生の積極的な情報取得には向いていないことが挙げられます。費用の面を解決することは容易ではありませんが、タッチパネルの操作型電子掲示板を設置すれば、利用者が自由に積極的に情報を手に入れることができるようになると考えられます。以上を踏まえて、フリースペースにおける学生への広報の宣伝効果を調査するために、試験的に例えば附属図書館のリフレッシュルームに手引きなどの情報冊子を設置することを提言します。今後、大型のフリースペースを設置する場合には、タッチパネル式の電子掲示板を設置することを提言します。

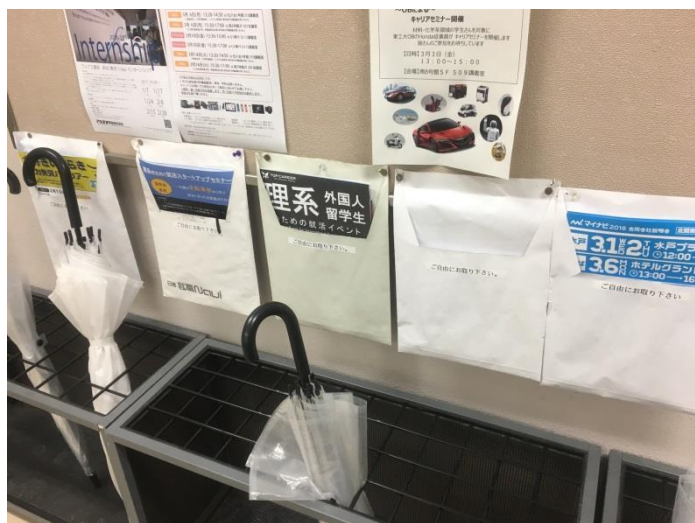


図 2.3.1 南 7 号館 2 階における広報の例

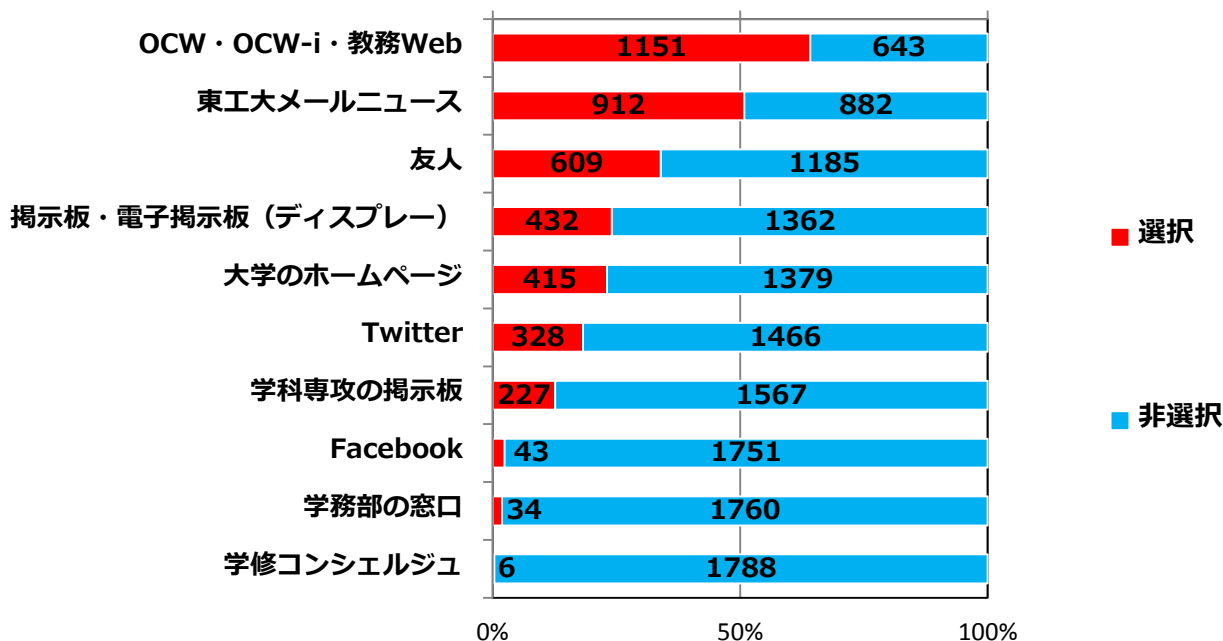


図 2.3.2 主に利用する情報源(最大 3 つ複数選択)

2. 全学を通して重要な提言

2 番目に、学生の集まりやすいスペースで留学フェアを行う、もしくは広報を行うことを提言します。留学フェアの主な対象は留学経験のない学生となるため、これまで留学を考えていなかった学生に対して広報を行う必要があります。現在、留学フェアは蔵前会館で行われていますが、蔵前会館の近くには講義室はなく、蔵前会館を通る学生は大岡山北地区の学生か、緑ヶ丘地区の学生に限られてしまい、学生の多くは蔵前会館を通らずに生活していると考えられるため、情報を事前に入手していない学生は留学フェアの存在を知ることができないままにいる可能性があります。そこで、附属図書館の地上階の学習スペースの場所に工大祭のカウントダウンのような形で大きく広報をすると効果的であると考えます。また、将来的な話ですが、大岡山の旧附属図書館跡地に建設予定の建物で、留学フェアを行うと登下校の際に足を運ぶ学生が増えるのではないかと考えます。

2.4. 重要な提言 3: 動画化による講義の補助

本学は教育改革によってクォーター制となり、例えば 2 単位の科目は学期制だったときは週 1 回の講義が週 2 回と以前より多く行われるようになりました。それを受けて学生から「クォーター制になって週に 2 回の講義が実施されるようになったが、1 週間病気になると講義についていくのが難しい」といった意見が 6 件寄せられました。インフルエンザなどの病気や、学会参加などで欠席すると、週 2 回実施の講義では 2 回分の講義を続けて欠席することになってしまうことがあるため、大きく遅れを取ってしまいます。この問題に対し、講義を動画化して学生が後日受講できるようにすることで学習の遅れを補うことができるのではないかと考えます。また、教育改革ではグローバル化が進む社会に対応するため、平成 31 年 4 月には大学院の専門科目を英語で開講する予定となっていますが、学生からは「英語だと講義についていけない」との意見が 184 件と大変多く寄せられました。講義の動画化によって学生は事前に予習を行うことができたり、後から講義中に聞き取れなかった文言を聞き直すことができたりするようになるため、英語での講義をより効果的に学習できるようになると考えられます。

講義の補助としての動画化の課題の一つとして、講義を録画することへの教員側の抵抗感が大きいと考えられます。特に現在、東工大は MOOC というオンラインで講義を受講できるムーブメントに積極的な姿勢が見られ、撮影スタジオが設けられるなど設備や環境が整いつつあります。一方で、動画化された講義は一部のみであり、学生にとって実用的な補助教材にはなっていないように感じられます。この状態を打開するためには、具体的にどのような抵抗感が教員側にあるのかを明らかにする必要があります。そこで、後述の提言 2-6「教員調査の実施と情報公開」のような教員に向けたアンケートやヒアリングを通して問題点を分析することを提言します。

次に講義の動画化を実現するための具体的な方策について述べます。先程の講義を録画することへの抵抗感には次のものが予想されます。

1. 動画にするために、講義の準備や編集などに手間や時間が多くかかる。
2. 動画化をするためには内容の完全性が必要であり、それを担保するための負担が大きい。特に英語の講義では内容だけでなく英語力の向上も必要になる。
3. 教育改革によりカリキュラムが変わり、そのための準備をしているため、動画化の準備にまで進むことができない。
4. 録画されていると、集中して講義を行うことができない。

今回の講義動画化の提案は予習や復習に対する補助が目的であるため、全世界への公開や、MOOC などのオンラインで講義をいつでもどこでも受講することができるといったところまで踏み込む必要はないと考えています。大阪大学ではすでに復習での活用を目的に講義自動収録配信システムが導入されており、本学での導入に参考になるものと考えます。²そこで、講義の様子をビデオカメラで録画し、その動画は附属図書館にある映像視聴機器からのみ利用できるようにし、視聴可能期間を設けて学生が視聴できるようにすることを提言します。これによって、視聴対象が大幅に制限されることから教員側の 2 番目に挙げた抵抗感が大きく減少するのではないかと考えます。次に 1 番目の抵抗感に関して、動画化への補助スタッフとして学生を TA として雇うことを提言します。TA が補助作業を行うことにより、教員の負担を減らせることができるようになると考えます。3 番目と 4 番目の抵抗感に関しては、今後、時間の経過によって解決していくものと考えます。

今回提言している簡易な動画化制度をまず設けることで、MOOC などのオンライン配信を段階的に達成しやすくなるのではないかと考えます。講義を公開する規模は小さくなりますが、簡易な録画手法での動画化による講義の補助を試行的に行っていくことを提言します。

2.5. 重要な提言 4: 留学への支援の更なる強化

学生の留学経験の有無は、図 2.5.1 のようになっています。社会のグローバル化が進む中、留学経験を積むことは異文化理解だけでなく、海外での活躍などの様々な場面で役に立つと思われます。現在、東工大ではさまざまな留学支援が行われていますが、より一層の支援が必要であると感じられたため、留学未経験者向けの留学情報の拡充及び経済的支援について提言します。

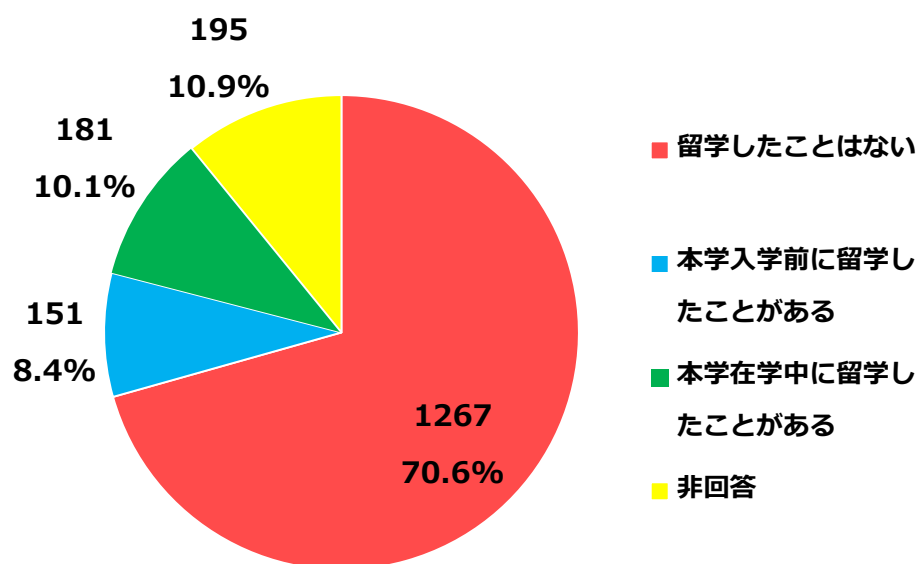


図 2.5.1 留学の経験

²大阪大学 教育学習支援コモンズ「講義自動収録配信システム EchoSystem(ECH0360)」:
<http://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/ictfored/forteachers/echo360>

2. 全学を通して重要な提言

グローバル化が進む社会に対応するために、教育改革で大学院の講義が英語化されましたが、今回の学勢調査で、留学経験が講義の英語化への抵抗感の低減に効果的である可能性が示されました。講義の英語化に対する抵抗感についての調査結果は前節の図 2.2.1 に示した通りですが、一方で、わずかですが講義の英語化に抵抗を感じていない学生がいる事もわかります。学生が二極化していることを表しているようにも思われますが、この二極化には留学経験の有無が関わっている可能性が示唆されました(図 2.5.2)。留学経験のない学生は非常に多いですが(図 2.5.1)、その一方で留学したいと考えている学生も同じ程度に多いことがわかりました(図 2.5.3)。留学の支援の更なる強化が求められていると考えられます。

留学をしたいと思っていない学生にその理由を聞いてみたところ、図 2.5.4 のような結果になりました。留学をしたくない理由は、「語学に自信がない」が 1 番目となり、「経済的理由」が 2 番目となっています。本節でそれぞれに対して提言します。

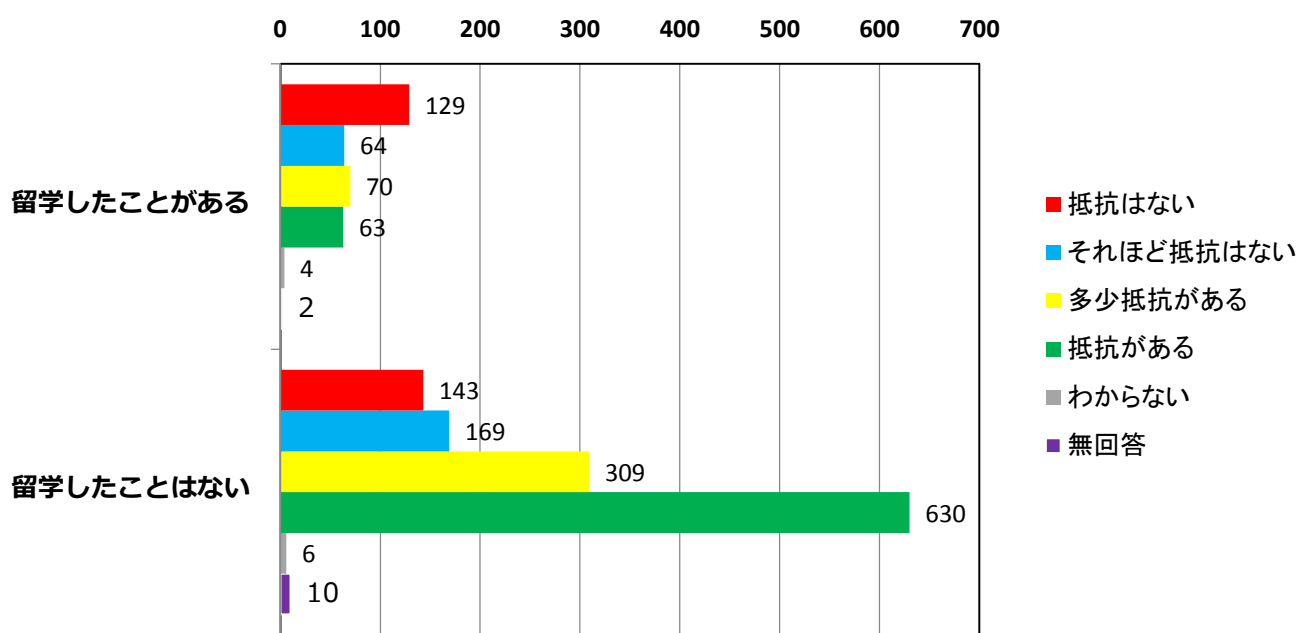


図 2.5.2 講義の英語化への抵抗と留学の経験の関係

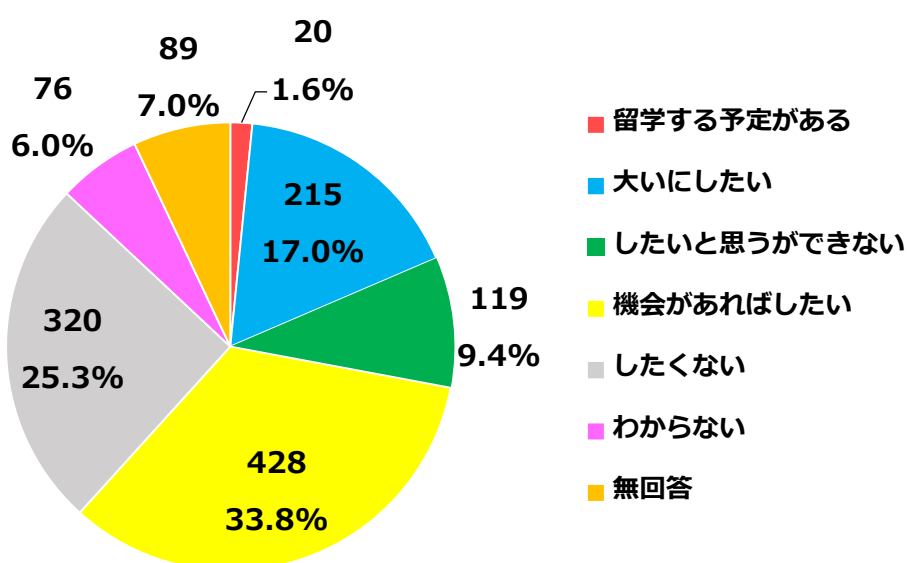


図 2.5.3 留学の経験

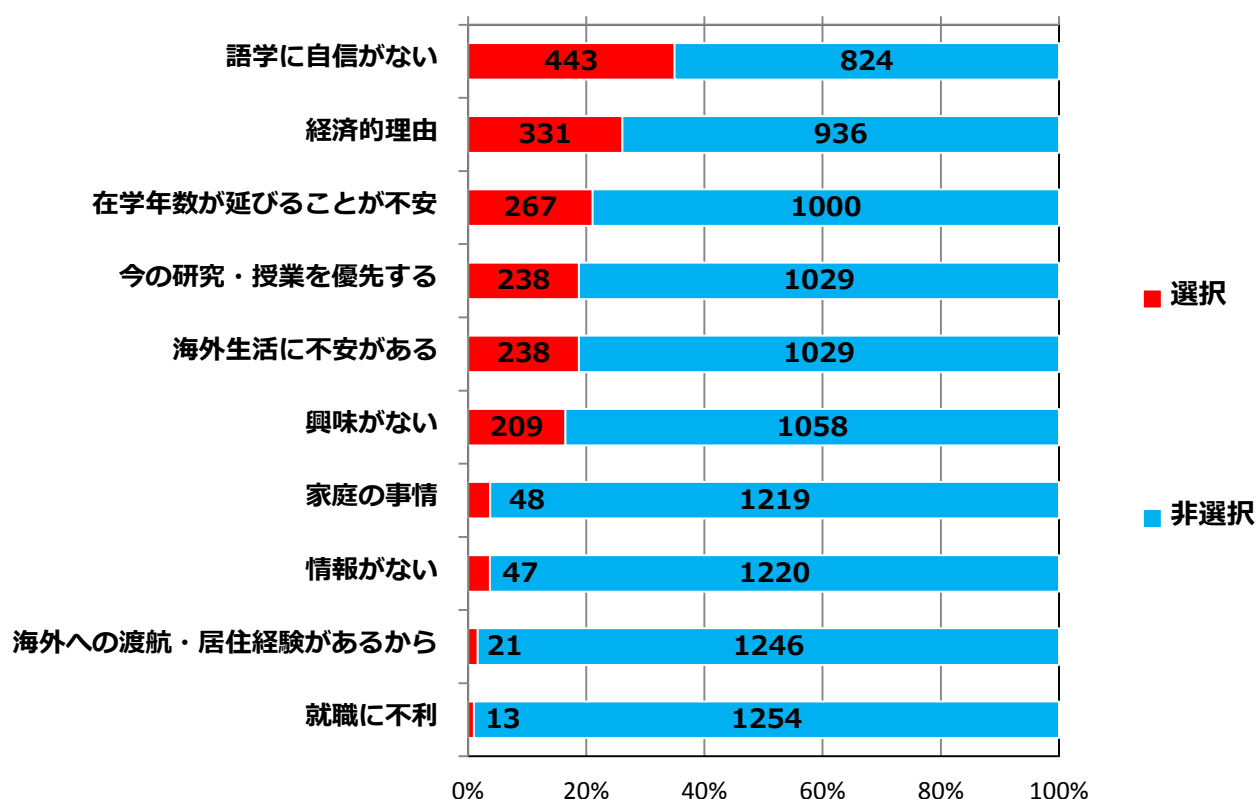


図 2.5.4 留学の経験のない学生の留学に行かない理由

「語学に自信がない」学生に対して留学を促すためには、留学フェアや留学コンシェルジュを利用した留学相談が効果的です。留学は語学力を培う上でのモチベーション強化になることから、語学力に自信がない学生にも積極的に留学を推奨するべきと考えます。自分の語学力が留学に必要な語学力と差があることを確かめるためには、相談をしたり調べたりすることが必要です。また、本学には留学経験のない学生が多く、周りの学生が留学をしていないために、留学に対して不安を感じている学生も多いと考えられます。その不安から留学を難しいものだと思い込み「語学に自信がない」と感じている学生もいると考えられます。そのため、留学相談をより強化する必要があると考えます。そのためには、留学情報を効率的に伝達する必要があります。自ら情報を集めようとししない学生への情報伝達については前節で述べましたが、本節では留学を経験したことのない学生に対して、より効率的に情報を伝達することに焦点を当てます。学勢調査の回答では「情報がない」という回答は少なく(図 2.5.4)、留学に関する情報は多いのですが、留学未経験者向けの情報は少ないように感じられました。例えば留学についてよく知らないでいる学生は、具体的な情報よりも、まずはそもそも留学とはどれほど費用が必要なのかといった一般的な情報が必要であると考えられますが、東工大ホームページの留学案内³では、実際のプログラムの参加募集であったり、奨学金の募集概要であったり、詳細な内容が多くなっています。具体的には留学相談の窓口、留学の流れ、留学への不安などを解説する Q&A のようなものを主に必要としていると考えられます。現在の東工大ホームページの留学案内のページでは、留学相談の窓口を案内する項目がページの 1 番下にあることからその存在を見つけづらく、また相談は予約制となっているため、利用に対する心理的なハードルが高くなっていると考えられます。また、留学の流れ、留学への不安などを解説した Q&A は残念ながら目につくようなところには見当たりません。これらを踏まえて、留学案内のホームページに、例えば「留学を考え

³東工大ホームページ「留学案内」:<http://www.titech.ac.jp/enrolled/abroad/>

2. 全学を通して重要な提言

始めた方へ」というページを設けることを提言します。留学の流れとして留学をしようとする学生のモデルケースを示し、留学フェアの参加や窓口での相談を促し、留学への不安を解消するような Q&A を作って掲載するとよいと考えます。

次に、留学は「経済的負担が大きい」ことが図 2.5.4 から読み取れます。東京工業大学では留学に対する様々な経済的支援を行っていますが、今回の調査からは、留学に対する経済的支援が十分ではないと学生が感じていることが示されています。図 2.5.5 を見ると、留学経験がある学生の多く(6 割強)が留学費用の支援強化を求めています。現在の大学からの経済的支援について国際教育推進機構にキャンパスミーティングで確認したところ、主な費用支援は月 8 万円(JASSO)であり、その他の制度として「トビタテ！留学 JAPAN」⁴という官民協働のキャンペーンなどを紹介しているとのことでした。留学費用の支援には渡航費が含まれておらず、その分の経済的負担が大きいと感じるかもしれません。また、キャンパスミーティングによると留学を支援する奨学金についてはそれほど応募が多いわけではなく需要に応じて供給できる状態であるとのことでした。こうした現状から、月 8 万円の費用支援からさらに支給額を引き上げる事と、渡航費用の支援強化を提言します。

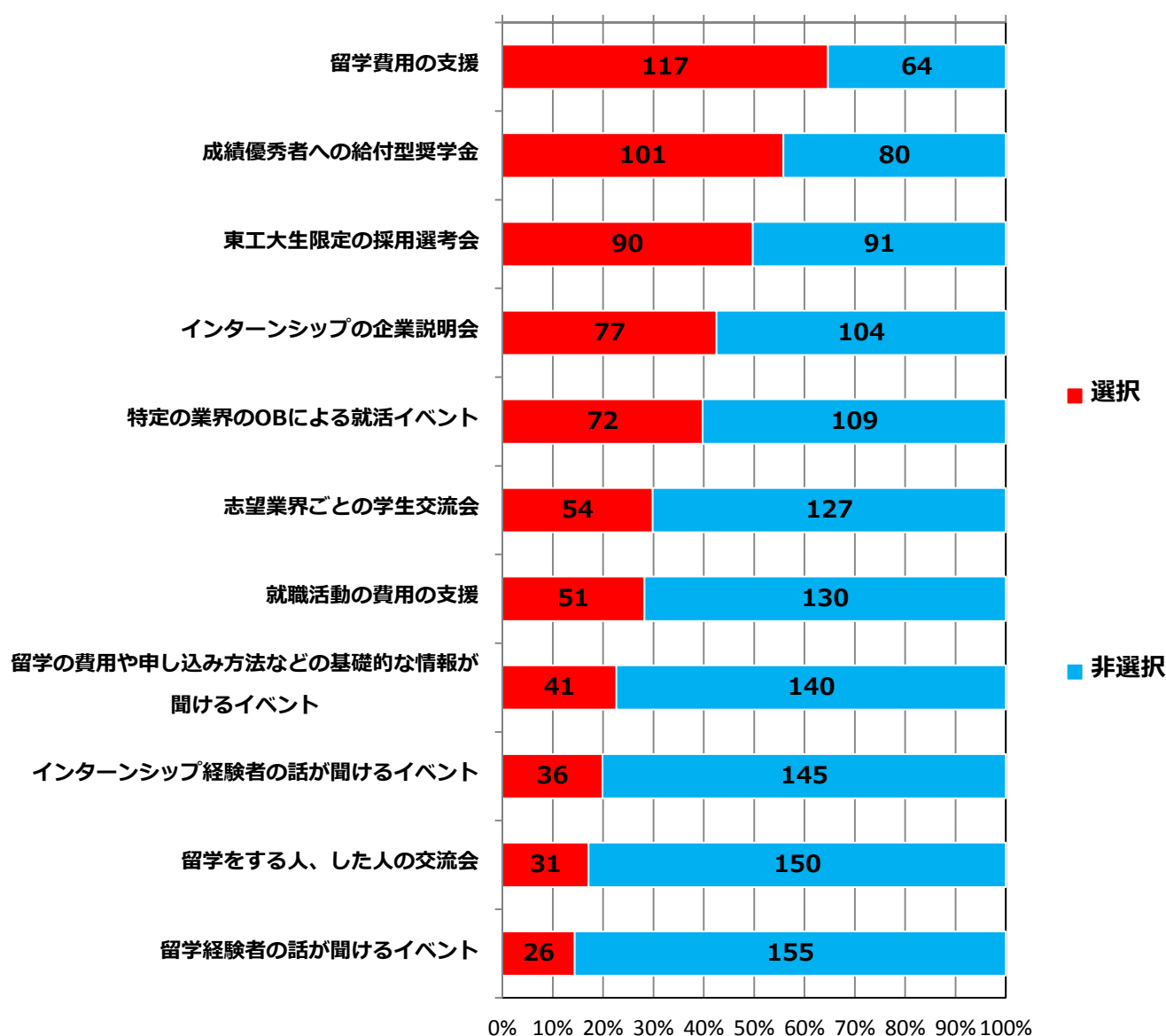


図 2.5.5 留学経験のある学生が望む、拡充してほしいサービス

⁴ トビタテ！留学 JAPAN HP: <http://www.tobitate.mext.go.jp/>